

## 平成26年度 薬学部FD研究会報告

田中基裕（文責）、安池修之、脇屋義文、武田良文、井上誠（委員長）

愛知学院大学薬学部FD委員会

平成26年度薬学部FD研究会は、薬学教育第三者評価で重要課題となる「**薬学分野における教員評価**」を主テーマとして実施された。FD研究会は講演会とワークショップで構成され、第一部は、平成27年2月18日に、「教員評価制度の導入実態」のタイトルで（株）進研アドによる講演会を実施した。講演会には全教員45名中41名及び心身科学部より3名の教員が出席した。第二部ワークショップは、2月23日に「教員活動の評価について」をテーマに、薬学部4号館において41名を教員が参加して実施された。また心身科学部より2名の教員がオブザーバーとして参加した。

第一部FD演会では、教員が漠然と感じている「今、この時期になぜ教員評価なのか？」を、自分自身のこととして知る問題提起となった。薬学系大学は、高度で質の良い教育・研究を追究・提供・推進することを通して、人間性と高い知性、問題解決能力と実践力を備えた「くすり」に携わる優秀な人材を育成し、社会に貢献していくことが求められている。この使命は、教員の個人の努力も重要であるが、大学組織全体（薬学部全体）により実現される。教員評価の大きな目的は、大学における教育者としての自覚、当事者意識の認識、薬学教育の現状への危機感の醸成であり、この目的達成のために、教員個々の教育力向上、ディプロマポリシーの再認識が重要な課題となる。

適切且つ公正な教員評価は、大学（薬学部）への進学希望者・保護者・高校教員に対する大学の説明責任を果たし、また現実として課題となる薬学教育第三者評価への対応が可能となる。このような教員評価は、国立大学では全学部を通して約82%が実施されているが、私立大学ではわずかに25%に過ぎず、主に医療系学部を中心に実施されているのが実態である。教員評価の実施項目としては、日本私立大学連盟の「医・歯・薬学分野における教員評価スタンダード・モデル」2011年改訂版が公表され、教育活動、研究活動、大学・学部運営、社会貢献の4項目で評価し、教員が自己点検評価しその結果をフィードバックすることが求められている。このような、教員評価に対する社会的ニーズを、講演会に参加した教員が自覚したうえで、第二部ワークショップが開催された。

講演会終了後、薬学部FD委員会は、今回のワークショップのテーマを、教員評価の中で最もファジィな「教育活動の評価」にテーマをしばり実施要項を作成した。ワークショップは、学部長より、今回のFDワークショップ開催の目的と教員評価の重要性が説明された。またFD委員長より、薬学部のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの再確認と、前回のワークショップのアンケート「**薬剤師として求められる基本的な資質とは？**」の解説が行われた。薬学部教員の多くは、資質として基礎的な科学力の重要性を認識していることが明らかになった（図1）。

### 薬剤師として求められる基本的な資質

- A. 薬剤師としての心構え
- B. 患者・生活場本位の視点
- C. コミュニケーション能力
- D. チーム医療への参画
- E. 基礎的な科学力
- F. 薬物療法における実践的能力
- G. 地域の保険、医療における実践的能力
- H. 研究能力
- I. 自己研鑽
- J. 教育能力

全体(全教員39名)	教育密度順位	重要性順位
1	E	614
2	F	514
3	H	469
4	A	399
5	C	389
6	I	362
7	D	302
8	B	295
9	G	280
10	J	261

図1. 薬剤師として求められる基本的な資質（教員39名のアンケート結果）

出席教員にはあらかじめ以下の6項目で事前アンケートをとった。

1. 大学教育、特に私立大学教員の職務（あるいは活動）を複数あげてください。
2. その中で、特に重要と考える職務（あるいは活動）を2つあげてください。
3. 教員の自己点検評価項目を複数あげてください。
4. その中で、特に重要と考える評価項目を2つあげてください。

5. 自己点検評価結果の活用方法を複数あげてください。
6. その中で、特に重要と考える評価項目を2つあげてください。

その結果、大学教員の職務として75%の教員が重要な点は、教育、研究の2項目と回答された。同様に自己点検評価項目も教育（教育の達成度）、研究業績の2項目に集約された。自己点検評価結果の活用方法としては、多くの意見が出されたが、大きく教育システムの見直し、研究活動評価システムの見直し、自己研鑽への活用、情報の開示等があげられ、評価結果に基づくインセンティブ、再任時への評価等の意見が出された。

ワークショップ前半は、ワールドカフェ方式により5～6人の7グループで討論した。第一ラウンドでは、「教育活動の評価項目について」をテーマに、評価項目の作成を行い、第二ラウンドでは「教育活動の評価基準」について活発な議論を行った。後半は、10人単位の4グループで「評価結果をフィードバックし、自己研鑽を促す方略の作成」をテーマに、スモールグループディスカッションを実施した。最後に各グループの報告・発表会を行い、佐藤教務主任からの総括を受けて閉会した。

各グループからの報告書は以下のとおりである。各グループの主体性を重視し、報告書を書式のみ変更して記載する。

#### FD ワークショップ-グループ1 報告書

報告者：波多野紀行

##### 【評価項目および評価方法について出された意見】

- ・評価項目はbasicとadvancedに分け、basicについては有無で評価する。
  - ・評価項目の質に対する評価は難しい。
  - ・助教に対する評価は別にの方が望ましい。
  - ・学生アンケートを改善する必要がある。
  - ・学生による評価（アンケート）により、質を評価する。
  - ・学生アンケートの時期として、卒業前あるいは、授業の前後にとった方が良い。
  - ・学生アンケートの結果は広く学内に公表すべきである。
  - ・教員評価は職位に応じて行うべきである。
  - ・際立った評価（非常に劣る、あるいは非常に素晴らしい）に注意を払う必要がある。
  - ・学生生活、就職活動に関する評価項目を追加すべきである。
  - ・教員毎に評価項目は異なることが望ましい。
  - ・数値化は行わず、絶対的評価、客観的評価、相対的評価のバランスをとりながら評価すべきである。
- グループディスカッション内で出された上記の意見を

基にグループ1の意見を集約した。グループ1としては以下の流れで、教員評価およびフィードバックを行い、自己研鑽を促すべきだという考えになった。

##### 【グループ1で作成した方略】

- 1、教員評価の項目について
  - ・評価項目については、学生生活・就職活動に関する評価項目を加え、basic・advancedに分ける。
  - ・職位ごとに評価項目は異なるようにする。
  - ・学生アンケートの中身、実施時期などを改善し、教員評価に積極的に取り入れる。
- 2、教員評価
  - ・basicな項目については、有り無しといった簡潔な評価を行う。
  - ・advancedな項目については適宜評価する。
  - ・絶対的評価、客観的評価、相対的評価のバランスをとりながら評価し、数字にあまり引っ張られないようにする。
  - ・最もよい、あるいは最も良くないといった、際立った評価に着目する。
- 3、情報公開
  - ・各項目の平均点を広く公表し、各教員に平均点との差について気付いてもらう。
  - ・各教員の評価項目について、学内で公表し、自発的な改善を促す。
- 4、フィードバック
  - ・はじめに所属長からのフィードバックを行う。
  - ・改善がみられない場合、学部長からのフィードバックを行う。
  - ・フィードバックの際に、目標設定を行う。



Group 1 スモールグループディスカッション

## FD ワークショップ-グループ2 報告書

報告者：上井 優一

グループ2ではまず、司会者の脇屋義文教授および司会補助の武田良文准教授がWorld caféで議論した内容を紹介した。

脇屋義文教授のWorld café (Table B) では、

1 ラウンド「教育活動の評価項目について」：「教育活動の種々項目の中で削除すべき項目はなし」、「(2)―④の項目を細分化する必要がある」、「(4) に卒後教育を加える」、「(5)―⑦レクチャー賞では6年間でアンケートをとる」、とまとまった。

2 ラウンド「教育活動の評価基準について」：「(1～4、6) については数値化のみで、点数化せずに現状報告すべき」、「(5、7) の学生アンケートでは記名式にするともに、アンケートの項目を作り直すべき」との意見がでた。

一方、武田良文 准教授のWorld café (Table C) では、

1 ラウンド：「(4) 大学院の項目は削除すべき」、「学生生活に関する項目 (アドバイザー制度、就職、進路) を設けるべき」、「小項目に試験 (本試験・再試験の合格数・不合格数)、模試・国試の科目分野別の得点率、実務実習 (学生・教員のポートフォリオ) を加えるべき」、「学生アンケートの内容を薬学部にあったものに充実すべき」との提言があった。

2 ラウンド：「可能な項目は定量化する」、「アンケートの充実によるフィードバックが必要 (具体的な基準はできず)」との意見が出た。

また、その他のTableでは、「模試、卒業試験監督業務 (時間・回数) や学生の態度に対する指導の項目を加えるべき」、「評価基準に関しては職位に応じた重み付け (卒業研究・学生実習) が必要」、「評価の活用方法が不明である」、「(5) 学生アンケートだけ異質である (客観的な評価を)」との意見が出た。

次に我々は教育活動の評価項目について議論し、以下の中項目を設けるべきとの結論に至った。1：講義等、2：実習等、3：教材作成、4：教育能力評価 (学生アンケートを利用)、5：第三者からの評価、6：教育者としての資質、7：学生の生活指導 (アドバイザー制度、就職)、8：アドバンス的な項目 (大学院の教育活動、卒後教育)。

また、基準については、「定量化する場合、職位別による必要がある」、「数値化できないものはYes / Noで評価する」、「項目毎の重み付けは、評価を受ける教員の自己申告制 (評価周期に課題?) にする」とまとまった。

評価結果の使用目的に関する議論も行い、「教員本人のためのチェック表 (マイナス部分の改善) が必要である」、「インセンティブがないと、実施しても変わらない」、「学内でオープン化すれば、教育活動の改善が促さ

れる」、「評価の実施によって、評価項目のことしかなくなる」との意見が出た。

最後に自己研鑽の方略について話し合い、学生アンケートの活用が挙げられた。しかし、信頼の問題があるとともに補助的な資料にすべきとの意見があった。目標の公開についても議論されるべきとされた。報告・発表会での質問はなかった。

## FD ワークショップ-グループ3 報告書

報告者：鍋倉 智裕

### 1、World Café での話の紹介

- ・何のための評価なのか？第三者評価対策なのか？学びのためなのか？
- ・役職間で不公平感、職位別に評価基準を設ける→すごく大変→項目を羅列して、あるかなしで評価
- ・項目外の内容が疎かになる可能性→厳密な評価よりざっくりした評価
- ・先ず自己評価する、自己の客観視、とりあえず進めない

### 2、評価項目

講義：講師、准教授、教授

実習：全職種

演習：全職種 (PBL、早期体験など、全体 / 講座別)  
学生指導 (講座・アドバイザー)：全職種

教材作成：全職種

試験監督：全職種

- ・講座単位で教育・研究指導など評価されるべき
- ・裏の仕事も評価されるよう ざっくり
- ・第三者評価の点検に規定があるため評価は必要

### 3、評価基準

○×評価、やったのかやらないのか、不公平感をなくするため

講義：○× (任された講義をやっているか)

- ・問題解決能力、国家試験対策、どちらを重視するのか
- ・学部としての方針が定まらないと評価の利用・フィードバックが難しい

実習：○×

演習：○×

学生指導 (講座・アドバイザー)：○× (個別指導の有無)  
個別指導の時間

- ・いい学生を伸ばす、悪い学生を底上げする

教材作成：○×

試験監督：○×

#### 4、フィードバック

○×に加え、自己申告・学生アンケートの内容を参考資料として利用

#### 5、自己研鑽を促すための方略

学生アンケートの項目を充実させて、資料として添付し、評価者（学部長）が改善要求を具体的にコメントする

#### 6、機能しない場合の対応策

改善しない人・頑張ってる人→講座費へ反映、逃げ切り対策にもなる

#### 7、まとめ

改善しない人・頑張ってる人→講座費へ反映、逃げ切り対策にもなる

- ・本学部は講座制のため個々の評価はむずかしいのではないか？
- ・大学・学部の教育方針をどうするのか、FDで議論してほしい

### FD ワークショップ-グループ4 報告書

報告者：富田 純子

#### World Café

内容：教員活動の評価基準、公正な評価方法について

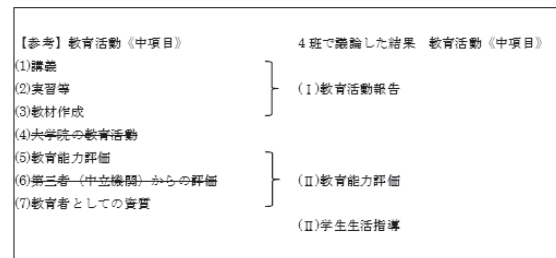
- ：第1ラウンド「教育活動の評価項目について」、
- 第2ラウンド「教育活動の評価基準について」にて出された意見

- ・助教は講義を担当していないため、職位による評価項目の重み付けを変える。
- ・講座により領域・方針が異なるので、講座の状況を踏まえる。
- ・職位、領域により教育活動が異なるため、より多くの評価項目を設ける。
- ・講義、実習等は教員の意欲ではなく、大学からの割り振りで回数（評価）が決定してしまうので、バランスをとることが難しい。
- ・公平性を保つためにはどう数値化すればいいのか難しい。
- ・質を高めるためには、ある程度数値化はした方がいい。しかし、評価基準は見直しが必要である。
- ・学生アンケートを記名式にして、学生にも責任を持ってもらう。
- ・学生アンケートの項目を、薬学部に合わせて内容に変更する。アンケートの実施時期も検討する（試験前、試験後、卒業前など）。

#### グループディスカッション

内容：評価結果を自己研鑽に生かすための方法論を作成する

教員評価は教員および大学の質の向上を目的としている。評価結果が昇給・人事・賞与に反映するものであると、公平性が重要視される。現状では職位や講座の領域ごとに様々な差異があり、それらの違いや特性を考慮した場合、詳細な基準や項目の設定が求められるため、4班では評価結果が「昇給、賞与に反映しない」という前提のもと検討した。医・歯・薬学分野における教員評価スタンダードモデルの教員評価項目「教育活動」を参考にした。



評価項目について議論された内容

- ・中項目「(1)講義」「(2)実習等」「(3)教材作成」は、ひとつの中項目「教育活動報告」にまとめ、活動記録として記入する。
- ・講義、実習の時間数は、多ければ高評価としない。
- ・中項目「(4)大学院の教育活動」および「(6)第三者（中立機関）からの評価」は評価項目から除いた方がいい。
- ・中項目「(5)教育能力評価」および「(7)教育者としての資質」は、ひとつの中項目「教育能力評価」にまとめる。
- ・「教育能力評価」の小項目は「①授業の質」「②PBLの質」「③基本姿勢」「④ベストレクチャー賞」にし、自己評価および学生アンケートに基づく評価を行う。
- ・「教育能力評価」は学生アンケートに基づいて行うが、アンケートの時期や内容は精査しなければいけない。アンケートは記名式にして学生にも責任を持ってもらう。
- ・中項目「(5)教育能力評価」の小項目「②試験の出題問題の質」は評価しにくいので除いたほうがいい。単位の取り易い科目が、評価が高くなるのはおかしい。
- ・「学生生活指導」という項目を追加する。学生のメンタルケアや、アドバイザーとしての指導、就職・進路指導、卒後教育等を小項目に追加し、記述式で報告する。

評価結果の活用法について議論された内容

- ・個別にフィードバックを行い、学生アンケートと自己評価を照らし合わせる。
- ・評価による順位付けが重要ではなく、下位者の改善を図り、学部全体の質を向上させる。ボトムアップを目的とする。
- ・面談にて短期・中期目標を決定し、建設的なフィードバックを行う。
- ・助教の任期を考慮し、評価は3年ごとに行う。

ワークショップ終了後、参加教員に対して以下の2項目について自由記載方式のアンケートを実施した。

- ① ワークショップについて、ご意見・感想をお書きください。
- ② 今回議論した教育活動以外の活動、研究活動、大学運営活動、地域・社会貢献活動の評価に関して、ど

のような評価項目、評価基準が適切と思われるかお考えをお聞かせください。

アンケート①で得られた主な意見は下記のとおりである。

- 教員評価は教育の質の向上に役立つ
- 役職ごとの評価項目と評価基準が必要
- 教員評価のエンドポイントが曖昧
- 教員評価の重要な因子となる学生アンケートの充実
- 教員評価を短いスパンで実施する
- 教員評価をテーマとしたFDを継続的実施する

アンケート②では、研究活動、大学運営活動、地域・社会貢献活動は、比較的容易に数値化しやすく、どの点に重点を置くかの検討が課題との意見が大半であった。FD委員会では、教育活動以外の評価についても議論の場を設ける企画をしている。

今回の薬学部FD研究会では、愛知学院大学薬学部の教育理念、「医療を協働の場として人々の健康維持と医療の発展に積極的に貢献し、共創を通じて未来を開拓する医療薬学専門人の養成を目指している。」を念頭に、教員自らが律して自己点検評価を行い、理想的な薬学教育に対する共通意識を高めることを主題に実施した。大学教育は、学生・教員・事務方の三位一体で成り立つ。特に、教育活動は、教員・事務方が日常的に直接学生と触れ合うことよって成り立つ。このことを認識できず、教育は授業から成り立つといった古い考えの人材は、教育の現場から早期に身を引く英断も必要であろう。今回のFDにおいて、参加した全教員が危機感を持って、「医療薬学専門人」の養成するために、教員として何が必要かを共通の課題として認識したことは大きな成果である。薬学部FD委員会では、教育活動以外の評価についても議論の場を設け、愛知学院大学薬学部における医療人育成教育に方向付けを進めていく。

----- ★★ ★ -----

#### FD ワークショップ参加者名簿

グループ1：河村好章（司会）、横沢英良、國正淳一、小幡 徹、梅村雅之、小川法子、波多野紀行（報告者）、徳本真紀（発表者）、加藤文子

グループ2：脇屋義文（司会）、村木克彦、武田良文、森田雄二（発表者）、伊納義和、田邊宏樹、渡邊法男、鈴木由香、堺 陽子、上井優一（報告者）

グループ3：佐藤雅彦（発表者）、鍋倉智裕（報告者）、古野忠秀（司会）、恒川由己、長田孝司、浦野公彦、森田あや美、高橋知里、木村聡子、川寄達也

グループ4：山本浩充（司会）、安池修之、茂木真希雄、大井義明、巽 康彰（発表者）、富田純子（報告者）、李 辰竜、中島健一、松村実生

タスクフォース：櫛 彰（学部長）、井上 誠（FD委員長）、田中基裕

【謝辞】本ワークショップ開催にあたり、会場設営、アンケートのとりまとめ等に協力して下さった薬学部事務職員の皆様に深謝いたします。